

わが国におけるめん羊飼育の現状と問題点

北海道立滝川畜産試験場 平山秀介

1 はじめに

わが国におけるめん羊飼育頭数は1957年の94万頭をピークに減少の一途をたどり、今日ではわずか12千頭にすぎない。うち北海道はおよそ5千頭である。この原因については後に触れるが、いずれにしても、めん羊はこの10年間、いわゆる農政の流れからはずれ、各種の指導あるいは補助事業の対象から除外され、家畜としての戸籍を失ってきたといっても過言でない。このことを反映して、めん羊は各地の大学および畜産試験場における研究対象からも消え、わずかに道立滝川畜試および県立埼玉畜試ではそぼそと対応しているのが実態である。

もちろん、めん羊を実験動物として用いた研究は盛んであり、繁殖あるいは消化生理といった分野で、多くの成果が報告されている。しかし、現実のめん羊飼育の場を想定し、それを育成し、発展させることを配慮したものでないだけに、残念ながら、即利用できないものが多い。

一方、1975年ころから、めん羊に対する関心が徐々に高まり、各地でいろいろな形態での飼育が試みられている。とくに、東北地方を中心に、水田利用再編の動きも加わって、海外からかなりまとまった頭数の導入が続いており、種畜価格も高水準で推移している。また、企業的なめん羊専業牧場もいくつか誕生し、一部はすでに軌道に乗りつつある。

しかしながら、わが国にめん羊を本格的に定着させ、増殖を図るには、解決すべき多くの問題がある。そこで、めん羊の置かれている現状を理解し、これから発展させていくための糸口を探るため、わが国におけるめん羊の歩んできた歴史的な経過を振り返るとともに、最近の動きを紹介し、これからめん羊飼育を振興する上での問題点を検討した。

2 歴史的経過

1) 明治時代(1868~1911年)

わが国のめん羊の歴史は比較的新しく、産業的な役割をもって飼育され始めたのは、明治維新以降の

ことである。当時、近代化とともに興ってきた羊毛製品需要に対処するため、羊毛生産を主目的に、政府によっていくつかの奨励策が進められた。アメリカ、中国、オーストラリアなどからサウスダウン、メリノ、中国種など数多くの品種を輸入する一方、1875年に下総牧羊場を開設し、緬羊技術員を養成するとともに、「緬羊貸付内規」によって、めん羊を民間に貸付または払下げた。これに呼応して、各地に民間牧場が開かれている。一方、道内では、北海道開拓使によって、1876年に札幌牧羊場および桔梗野牧羊場が設置された。しかし、品種面では混迷の時代であり、飼養面では欧米を模倣した多頭数放牧方式が採用されたが、管理技術の稚拙、とくに各種寄生虫による被害が大きく、また草地の改良および利用技術にも欠けていたため、成績は芳しくなく、飼育頭数は増加しなかった¹⁾。

その後、明治中期から後期にかけて、見るべき策のないまま、めん羊飼育は沈滞した。この間、前記牧羊場は1886年から1888年の間にいずれも廃止され、政府のめん羊奨励策は一時中止された。札幌牧羊場のめん羊は北海道庁真駒内種畜場および札幌農学校のめん羊に移された。品種はメリノ、サウスダウンおよびコッツウオールドである。しかし、種畜場のめん羊事業は1911年に廃止され、札幌農学校のめん羊は1899年ころに消滅している。

1908年、農商務省月寒種畜牧場でめん羊飼育が開始されることになり、イギリスからシュロップシャー(雄2, 雌40)およびサウスダウン(雄3, 雌40)が輸入された。その後毎年両種合わせて100頭前後の雌羊が繁殖に供され、いずれも良好な繁殖および育成成績を示した²⁾。

2) 大正時代(1912~25年)

第1次大戦のため海外からの羊毛輸入が途絶した経験から、軍需羊毛確保のため、1918年農商務省は「緬羊100万頭増殖計画」を策定した。その中核事業として、月寒および滝川を含む全国5カ所に種羊場

が開設された。この計画は明治初期のめん羊奨励事業と軌を一にしたものであったが、農家における少頭数舎飼方式を想定した点で、顕著な相異があった。しかし、その後の世界恐慌のため、計画は縮小され、1923年から24年にかけて、あいついで月寒と滝川を除く3場は、廃止された。

月寒および滝川種羊場の発足当時（1919年5月末現在）の品種別頭数をみると、月寒がシュロップシャー63頭およびサウスダウン22頭、滝川がシュロップシャー682頭、サウスダウン2頭およびメリノ63頭である。また、同年における全国の飼育頭数は5,600頭で、メリノがもっとも多く、以下シュロップシャー、サウスダウン、中国種の順であった。

一方、1918年から1925年にかけてのわが国の輸入頭数は6,983頭に達している。当初はシュロップシャー、ランブーイエメリノおよび中国種が多かったが、その後コリデール、ランブーイエメリノおよびオーストラリアメリノに変っている。また、少頭数ながらオストフリーション、ロムニーマーシュ、リンカーン、サウスダウン、チェビオット、ボーダーレスターおよびロマノフなども輸入されている⁴⁾。

当時、羊毛は千住製絨所が一手に買入れたため、販売は順調であったのに対して、羊肉の消費は食習

慣がないだけにはかばかしくなった。このため、民間の種めん羊需要はメリノ、次いでコリデールへと移ってきた。このことが輸入の品種の変化にも反映している。すなわち、この時期に明治初期から混迷してきた品種がようやく毛用種に固まってきた。それにしても、実を結ばなかったとはいえ、今日育種面から世界的に注目されているロマノフ（多産性）およびオストフリーション（多乳性）が、50年前にすでにわが国に紹介されていたことには深い感銘を覚える。

3) 昭和前期（1926～45年）

昭和に入って、1918年（大正7年）以来、農商務省が積極的に進めてきた各種の奨励策がようやく効果をあげ、めん羊飼育頭数は増加を示した。

当時の奨励策は次のようなものである⁴⁾

- (1) めん羊奨励機関の設置（含種羊場の設置）
- (2) 種めん羊の輸入
- (3) めん羊飼育委託
- (4) 種めん羊の払下および貸付
- (5) めん羊技術員の養成
- (6) 道府県のめん羊に関する設備および技術員設置に対する補助
- (7) めん羊飼育に関する奨励金

表1 月寒および滝川種羊場における品種別頭数
（1926年末および1934年末）

	1926						1934					
	月寒			滝川			月寒			滝川		
	雄	雌	計	雄	雌	計	雄	雌	計	雄	雌	計
ランブーイエメリノ	102	446	548	140	466	606	9		9	30	83	113
オーストラリアメリノ	23	126	149	25	76	101				14	14	28
シュロップシャー	10	3	13	17	46	63	1		1			
コリデール	61	426	487	68	322	390	94	229	323	158	1,149	1,307
ロムニーマーシュ	8	39	47									
リンカーン	1		1									
チェビオット	3	11	14	1		1						
ボーダーレスター		1	1									
ロマノフ	5	23	28	2	1	3						
オストフリーション	12	114	126	1		1	5	1	6			
中国種					4	4						
雑種		10	10	1	44	45						
計	225	1,199	1,424	255	959	1,214	109	230	339	202	1,246	1,448

注：滝川種羊場の1934年末頭数は1934年度末の成羊頭数である。

(8) 優良種めん羊の買上

1926年末および1934年末における月寒および滝川種羊場の品種別頭数は表1のとおりである。^{4) 5)} なお、この間に農商務省滝川種羊場は1931年に廃止され、翌1932年北海道庁に移管されている。

両年を比較すると、月寒種羊場ではけい養頭数が著しく減少され、コリデールに絞られている。また、滝川種羊場でもシュロップシャーは消滅、ランブーイエメリノおよびオーストラリアメリノは減少し、コリデールが主体となってきている。すなわち、民間の種めん羊需要に対応して、けい養品種が変化している。

道庁移管とともに制定された「北海道庁種羊場規程」の第一条によると、滝川種羊場は次の業務を行なうことになっている。⁶⁾

- (1) 種めん羊の繁殖および育成
- (2) 種めん羊の配付、貸付および種付
- (3) めん羊に関する調査および試験
- (4) めん羊に関する講習、講話および実地指導

すなわち、種羊場の使命は種めん羊の増殖および配付にあり、直接育種改良を目的とはしていなかったようである。

その後、1935年には第2期拓殖計画が見直され、寒地農業と農村生活の改善を目的に「綿羊30万頭計画」が立てられた。この計画に沿って、滝川種羊場には毎年数百頭のコリデールが主としてオーストラリアから輸入された。一方、政府も国際情勢の悪化に伴って、軍需羊毛の自給体制を確立するため、1936年「羊毛自給施設奨励計画」を樹立した。⁷⁾ 種羊場白河支場(1938年)および駿河支場(1940年)を設置するとともに、各種の奨励策を実施している。こうした施策および社会的背景から、この時期におけるめん羊飼育頭数は急激に増加した。

4) 昭和中期前半(1946~56年)

第二次大戦後の極度な衣料不足を背景に、めん羊の飼育頭数は、1946年の196千頭から1956年には893千頭へと飛躍的に伸びた。しかし、家用に委託加工のための羊毛生産を目的としたものが多く、1戸当り飼育頭数は1.5頭と少なく、少頭数舎飼(けい牧)方式が主体を占めた。

この時代に、全国的には日本綿羊協会(1946年)および日本綿羊登録協会(1949年)、道内には北海道綿

羊技術連盟(1948年)および日本綿羊登録協会北海道支部(1950年)が設立され、めん羊関係の組織が一挙に整備された。

また、1950年には種めん羊の輸入が再開され、1956年までに全国で1,000頭近いコリデールが輸入された。滝川種羊場では1950年および1953年にオーストラリアから導入しており、これによって著しく大型化し、剪毛量も増加している。

表2 滝川種羊場におけるコリデール雌の剪毛前体重および毛量の推移

年 度	頭 数 (頭)	剪毛時体重 (kg)	毛 量 (kg)
1935	500	33.6	2.8
40	2,171	33.4	2.7
45	913	33.6	3.5
50	635	44.0	3.0
55	653	51.6	4.0
60	609	54.4	5.0
65	489	52.0	4.6
70	318	47.1	3.7
1975	91	52.5	4.5

5) 昭和中期後半(1957~66年)

1957年はわが国のめん羊飼育頭数が94万頭(北海道26万頭)と最も多くなった年である。しかし、この時期から経済復興に伴って、海外から安価な羊毛が大量に輸入されるようになり、羊毛生産を主目的にしてきた国内のめん羊飼育は終焉を迎えることになる。そこで、めん羊関係者の間では、当時ようやく普及してきた羊肉消費に活路を見出すため、肉生産への方向転換が真剣に論議され、コリデールの肉用型への改良および肉用種との交雑利用が考えられた。

このため、各地にサウスダウンをはじめとした数種の肉用種が輸入された。しかし、明治、大正の大量輸入に及ぶべくもなく、いずれも導入頭数が少なく、十分な特性あるいは適応性が把握されないまま、ほとんど消えてしまった。一方、コリデールの肉利用を図る目的で行なわれた、これら肉用種との交雑種の産肉性が優れていることが明らかにされ、1967年からの本格的なサフォークの輸入につながることになる。⁸⁾

しかし、1959年に羊肉（冷凍肉）および1961年に羊毛の輸入が自由化されたこともあって、輸入量は年々増加する。この結果、わが国のめん羊生産物の市場構造は破壊され、めん羊飼育頭数は減少を続けることになる。このことは見方をかえると、農産物の輸入自由化によって、国内生産物が葬り去られる、生きた事例を示したことになる。

なお、北海道庁では1964年にめん羊増殖基地を道内4カ所に設置し、さらに1967年から69年にかけてサフォークを道内7カ所に輸入するなど、最後の抵抗を試みている。これが、結果として一つの歯止めとなり、今日のめん羊見直しの起爆剤の役を果たしている。

6) 昭和後期（1967～）

最近における羊肉および羊毛の年間輸入量はそれぞれ15万tおよび20万t、金額にして2千億円に達している⁹⁾。これは、本道における牛乳または米の生産額に匹敵する膨大な額である。この結果、めん羊生産物の自給率は0%とあってよい状態にある。

しかし、1970年ころから、自給飼料資源の有効利用の観点から、めん羊を見直すべきでないかといった提言が見られるようになった。^{10) 11) 12)}その後、1974年には日本緬羊協会と中央畜産会の共催で、多頭数飼育農家による「緬羊問題研究懇談会」が開かれ、現状での問題の抽出が試みられた。¹³⁾1975年になると「日本緬羊研究会有志懇談会」（8月）および「第20回日本緬羊研究会」（10月）において、関係者による検討が進められ、^{14) 15)}また、国民食糧会議および農政研究センターにおいても提言が行なわれている。^{16) 17)}

1976～77年には、農林水産省が「めん羊の生産利用に関する現地実態調査」を行なっている。¹⁸⁾また、その後いくつかのめん羊見直しについての懇談会がもたれている。^{19) 20)}

このように、めん羊に対する前向きに取り組む姿勢に加えて、海外生活の体験者が増え、現実にはラムに対する嗜好が芽ばえてきており、国内で本物のおいしいラム料理を期待する声が聞かれるようになってきた。^{21) 22)}

3 最近の動き

1) サフォークの輸入

肉用種であるサフォークがわが国にはじめて紹介されたのは比較的新しい。鈴木によると1955年国際基督教大学から関東東山農試え雌6頭が寄贈されたのが最初で、翌56年には同農試がオーストラリアから種雄羊2頭の寄贈を受けている。その後、1959年に御料牧場に種雄羊2頭が輸入され、コリデールとの交雑利用が行なわれた。²³⁾

わが国で最初に本格的にサフォークを導入したのは滝川畜試で、1967年オーストラリアおよび1969年カナダから本種を計160頭輸入し、調査および増殖を開始している。同時に地方競馬全国協会の補助を得て、道内7カ所に計800頭の本種がオーストラリアから導入された。

これが、結果として予想以上に評価され、めん羊頭数の減少が続く中、本種だけは着実に増加してきた。現在では道内におけるめん羊品種の過半数を占めている。このことは、本種の持つ早熟早肥な特性のほか、三村のいう「新しい酒は新しい皮袋に」といった感じ、²⁴⁾すなわち、従来のコリデールにない黒色の気品のある容姿がかもし出す新鮮な印象の果たした役割が大きいものと考えられる。

その後、宮内庁御料牧場および農林省十勝種畜牧場にオーストラリアおよびカナダから、さらに民間企業牧場にもニュージーランドから本種が輸入されている。また、1976年以降、北日本各県の経済連がめん羊預託事業を開始しているが、いずれもアメリカからサフォークを輸入している。

2) 道内におけるめん羊飼育の実態

道内におけるめん羊飼育はいくつかの類型に分けることができる。

第一は、地方自治体による飼育である。現在およそ10市町村が公共牧野を舞台に、増殖、草地管理あるいは観光と目的は異なるが、めん羊飼育を続けている。このうち、士別市と羽幌町は1967～69年にサフォークを導入して以来、継続飼育してきたものである。その他は、ここ数年の間に乳牛育成牧場の一部において飼育をはじめたものが多い。いずれにしても、めん羊資源が枯渇し、入手希望の多い今日、貴重な種めん羊供給基地の役割を果たしている。

第二は、個別農家での飼育である。

表 3 サフォークの輸入実績(1967年以降)

年 度	産 地	頭 数			導 入 先 お よ び 頭 数 (雄-雌)
		雄	雌	計	
1967	オーストラリア	14	253	267	滝川畜試(10-50)ホクレン(4-103)土別市(0-100)
68	〃		300	300	えりも町(0-100)網走市(0-100)羽幌町(0-100)
	カナダ	1	2	3	滝川畜試(1-2)(寄贈)
69	カナダ	2	98	100	滝川畜試(2-98)
	オーストラリア		300	300	土別市(0-100)亀田町(0-100)美幌町(0-100)
70	〃	5	50	55	宮内庁御料牧場(5-50)
74	カナダ	10	50	60	農林省十勝種畜牧場(10-50)
75	ニュージーランド	2	51	53	ハッピー牧場(2-51)
76	オーストラリア	7	60	67	宮内庁御料牧場(4-37)福島県畜試(1-5)日本化薬(2-18)
	アメリカ	20	445	465	岩手経済連(20-445)
77	〃	9	236	245	岩手経済連(8-187)上川生産連(1-49)
78	〃	4	574	578	新潟経済連(4-574)
79	〃	35	503	538	農林省十勝種畜牧場(10-50)上川生産連(2-48) 青森経済連(3-67)山形経済連(2-80)宮城経済連(6-85) 群馬経済連(2-40)新潟経済連(10-133)
1980	〃	25	453	478	上川生産連(4-70)青森経済連(5-154)秋田経済連(1-42) 山形経済連(2-94)福島経済連(0-18)群馬経済連(1-0) 長野経済連(2-42)新潟経済連(10-32)
	ニュージーランド	8	12	20	滝川畜試(8-12)

めん羊飼育が斜陽になってきた中で、道内で最後まで飼育を続けてきたのは、十勝および北見地方の畑作農家である。これは、豆稈およびビートトップといった圃場副産物の利用によって、生産コストを低く押えることが可能なためである。現在では、飼育戸数が極端に少なくなり、組織的に活動しているところはないが、1戸当り30~50頭と多頭数飼育を目ざす農家が育ってきている。

一方、最近水田利用再編の動きの中で、空知および上川地方の水田農家で、めん羊飼育に関心がでてきた。1974年から、滝川畜試に対するめん羊飼育実習の希望者が増えてきたが、水田農家の占める割合が年々高くなってきている。すでに、こうした実習生を中心に市町村単位で飼育仲間が集まり、農協内にめん羊部会を発足させ、活動をはじめているところもある。

しかしながら、草資源に恵まれ、本来もっともめん羊飼育に適していると考えられる根釧および天北

地方の酪農家の間では、まだ積極的なめん羊飼育の動きはない。もっとも、これらの地方でも、すでに第一の市町村自体によるめん羊飼育事例は存在する。

これらの個別飼育農家にとって、当面の悩みは生産物の販路が確立していないことである。めん羊が見なおされつつある現在、資源が枯渇していることから、雌子羊は種畜として順調にさばけているが、羊毛および肉畜のための固定した販路がない。したがって、種畜販売に収入の多くを依存している。

第三は、企業的性格をもっためん羊専業牧場である。すでに、種畜、羊肉あるいは血液と生産目的は異なるが、いくつかの牧場ができていく。このタイプは規模も大きく、単に飼育だけでなく、生産物の消流についても積極的に販路の開拓を進めている。この面での道内の農協の対応が立ち遅れているため、当面これらの牧場と個別飼育農家とが、生産物消流の面で直接結びつく可能性が高い。

第四は、特殊な事例であるが、社会福祉関係施設

での羊飼いである。道立太陽の園で教育の一つとして取り入れられて以来、すでに道内数カ所の施設で飼育（採用）している。これらは、現時点ではかならずしも経済性を目的としたものではないが、将来に向けて本格的な取り組みを計画しているところもある。

3) 新潟県経済連によるめん羊預託事業

ここ2～3年来北日本の各県経済連で、水田利用再編の一環としてのめん羊導入事業が盛んに行なわれている。このうちもっとも組織的に事業を推進している新潟県経済連の例を紹介したい。

1977年秋の事業計画以来、滝川畜試と密接な連絡を取りつつ、経済連独自に次のような事業を行ない、短期間に生産から販売までの体制を築いている。

(1) 飼育技術指導

- イ 「肉緬羊飼育の手引書」の作成
- ロ 経済連および単協畜産担当者に対するめん羊飼育技術研修、滝川畜試で4回、合計22名実施
- ハ 飼育農家に対する技術講習会、1978年以来毎年実施

- ニ 映画「新潟のめん羊」の作成
- ホ 技術指導用パンフレットの配付

(2) めん羊

- イ アメリカから輸入 1978年～80年合計雄24頭、雌739頭
- ロ 北海道から導入 1978年雄24頭、雌54頭

(3) 生産物の消流

- イ 雌子羊は種畜として販売斡旋
- ロ 雄子羊は集荷、と殺解体、カット後、指定焼肉店（現在県下7店）に販売
- ハ ラム肉宣伝のための広告用パンフレットの作成配付、TVによるCM（指定店を表示）の実施

- ニ 羊毛は委託加工による布団綿還元
- ホ 羊皮は委託加工による敷物還元

(4) 研究会および講習会の開催

日本緬羊研究会は、めん羊関係者の研究発表および情報交換の場として、1955年に組織された。その後、めん羊飼育が斜陽化したにもかかわらず、毎年研究発表会および会誌の発行を続けてきた。一時、参加者も限られていたが最近では会員も増え、発表演題数も増加の傾向にある。

一方、めん羊飼育に関する講習会は久しく開催されなかったが、1980年に日本緬羊協会によって、めん羊飼育リーダー研修会が企画された。北海道、東北および関東・甲信越の3ブロックで開催されたが、それぞれ40～50名の受講者があり、めん羊に対する並々ならぬ関心が感じられた。また、同協会では、緬羊登録専門委員会を設置し、サフォークの審査標準の検討を進めるとともに、種めん羊の審査眼統一のための審査会を開催し、サフォークの資質向上のための一歩を踏み出している。

なお、同協会では、1980年に実務者向けのめん羊飼育手引書の発行も行なっている。

4 飼育振興上の問題点

これから、めん羊飼育を定着させ、発展させるには、当面次のような問題の解決が必要になる。

1) 品種の選定

家畜はいずれの畜種によらず、その地域における適応性の判定にはかなりの頭数を用い、年次を重ね、しかも想定されるいろいろの飼育条件を設定した中で、調査を行ない、結論を出す必要がある。とくにめん畜は豚、鶏などと異なり、自然環境を生かし、その中に溶け込んだ形で飼育される家畜であるだけに、その特性の判定には時間をかけた積み重ねが必要になる。めん羊は羊毛、羊肉のほか、毛皮、羊乳と用途が多岐にわたり、しかも羊毛に限ってみても、番手などによって、多様に仕向けられる。したがって、それぞれの国あるいは地域によって、長い歴史的背景の中から、目的によって異なった品種が作り出され、利用されている。たとえば、イギリスでは地域によって自然環境に適した特徴ある品種が作られており、経済的に意味のある品種だけでも40種近い。これが飼育形態および交雑利用と組み合わせられて、有名なStratificationを形成している。²⁵⁾ ニュージーランドでは緯度、高度によっていくつかの飼育形態があり、それぞれに適品種が作られ、有機的につながっている。²⁶⁾

ひるがえって、わが国で具体的に選定入手可能な品種となると、現時点ではサフォークまたはサフォーク雑種に限られる。しかし、わずか1万頭前後の飼育頭数の中で手当てすることはむずかしく、当面輸入に頼らざるを得ない。したがって、いろいろな

特徴ある品種が入手可能であるが、国内での飼育実績がなく、危険が伴う。結局、当面はサフォークに絞らざるを得ない。

今後の問題として

第一は、サフォークの資質向上である。現在、カナダ、アメリカ、オーストラリアおよびニュージーランドから本種が導入されているが、産地によって若干の相違が認められる。したがって、それぞれの特性の把握に努め、能力の向上を図る必要がある。しかし、現在能力検定法および改良組織は確立していない。当面、検定法としては種雄羊の直接検定、改良組織としてはニュージーランドにおける Sheeplan を参考することが考えられる。²⁷⁾

第二は、サフォーク雌羊を母体とした雑種生産による、繁殖性あるいは産肉性の向上である。諸外国ではめん羊の繁殖性向上のため、多産として評価の高いフィンあるいはロマノフを用いた研究が進められている。^{28~36)} また、すでにいくつかの多産品種が作出されている。^{37) 38)} 滝川畜試におけるフィンとの一代雑種は2.7頭の産子数を得ており、育種母材の入手によって、かなり容易に多産の問題は解決できそうである。しかし、これと産肉性の向上とをかみ合わせる事が今後の課題となる。また、繁殖期間の短縮、すなわち年2回繁殖についても、育種面からの検討が必要である。なお、若齢繁殖については、発育を良好にするということを条件に、一般化しつつある。

第三は、新しい品種の検討である。社会環境の変化によって、品種に対する要望も変化し、高度化してくる。したがって、常に時代に先行した形で、新品种の導入あるいは作出を試みなくてはならない。これには、第一・第二の問題解決を含めて、きちんとした育種機関および組織の整備が必要である。

2) 飼育技術

めん羊を実際に飼育する場合、当然飼育技術のよしあしが鍵を握ることになる。ここでは問題が2つに分かれる。

第一は、すでに確立されている技術の普及である。めん羊が消えて久しく、これから飼育を始める若い農業者に、いかにして飼育技術を習得させるかである。一般に当該地域の畜産技術指導者の中に、めん羊に明るい人が少なく、現実にごく初歩的な技術的

ミスで、生産があがらないことが多い。滝川畜試では毎年若干の実習生を受け入れ、効果をあげているが、当場の対応には限度がある。いずれかに、きちんとした飼育技術を教育できる訓練機関が必要である。

第二は、新しい技術開発である。このなかには、すでに先進国で開発されている技術の導入も含まれる。わが国におけるめん羊に関する研究が停滞している間に、海外における研究は著しく進展した。極言すれば、ここ10数年、わが国はめん羊飼育技術の分野で鎖国状態にあったといえる。たとえば、前項で紹介した多産品種の育種を受けての、人口哺育技術および早期離乳技術、あるいはエンテロトキシミアのワクチネーションなどは早急に取り入れる必要がある。これによって、めん羊の生産性を飛躍的に向上させることが可能となる。

それには、めん羊に対する試験研究体制の整備が必要である。わが国におけるめん羊飼育が、今後どのような形で展開するか不明な点もあるが、いわゆる企業の専業牧場の場合の技術対応は比較的単純であり、自力での解決も可能と考えられる。むしろ問題は、複合経営の形でめん羊飼育で、規模あるいは飼料基盤も千差万別であるだけに、木目の細かい技術対応が必要になる。

3) 生産物の販路

さきに記したように、貿易自由化により、1960年代に国内のめん羊生産物は価格面で競争力を失い、飼育頭数の減少を招いた。この結果、国産の羊毛および羊肉の販路は壊滅した。今日のわが国におけるめん羊あるいはめん羊生産物を取り巻く環境は、現時と基本的には変っていない。しかし、一つ一つ点検してみると、変り得る要素を含んでいる。事実、その間を縫って、生産が再開されているともいえる。

まず、羊毛は、本来保存性の高い生産物であり、長さ、番手など多種多様の需要に対して、国産で対応することは不可能である。したがって、今後とも副産物としての利用を考えるにとどめざるを得ない。たとえば、ホームスパン製作などによって、付加価値をたかめるといったことが考えられる。

一方、羊肉は、従来わが国に輸入されているのはマトンが主体で、主として豚肉の代替品として加工用に仕向けられてきた。最近、生食用の割合が高く

なっているが、これとてもジンギスカン料理に限定されている。すなわち、羊肉利用の本来の姿であるラムについては、輸入量も少なく、十分認識されていない。しかし、除々に理解されつつあり、今後消費の伸びる可能性がある。

そこで、国内生産が考えられるが、当然牛肉および豚肉などと異なって、輸入物との競争力が要求される。しかし、羊肉とくにラムは羊毛あるいはマトンと違って、鮮度と品質で勝負できる一面をもっている。もちろん、チルドでの輸入が考えられるし、事実すでにニュージーランド・ミート・ボードでは宣伝普及に努めている。しかし、輸送上の制約がある上、めん羊の持つ季節繁殖性から、現在のところ良質のものを年間を通じて持ち込むことはむずかしい。したがって、新潟経済連が行なっているような、肉専用種であるサフォークを用い、産直方式をとることによって、鮮度の高いラムを供給し、消費を開拓し、生産を拡大することが考えられる。

しかし、ラムの生産コストを引き下げるには、ラム生産に伴って生産される毛皮、羊腸、さらにはマトンおよび羊毛についても販路を確立する必要がある。関係者の地道な努力が要求される。

5 おわりに

支部会事務局から「北海道におけるめん羊の育種」というテーマを与えられた。しかし、わが国のめん羊を取り巻く環境は厳しく、かつて主流を占めたコリゲルはすでにほとんど消えてしまった。現在飼育されているサフォークもわが国に導入されてから日が浅く、育種問題にしばって論ずるには材料不足である。そこで、標記の題に変更させていただき、歴史的経過の中で、品種の推移について触れてみた。

文 献

- 1) 農商務省農務局(1919) 本邦内地ニ於ケル綿羊事情
- 2) 農商務省月寒種畜牧場(1914) 月寒種畜牧場事業報告第二回
- 3) 農商務省農務局(1920) 綿羊飼育概覽
- 4) 農林省畜産局(1936) 本邦ノ綿羊 第三輯
- 5) 農林省畜産局(1927) 本邦内地ニ於ケル綿羊ノ飼育
- 6) 北海道庁種羊場(1933) 昭和七年度業務成績報告書
- 7) 農林省畜産局(1966) 畜産発達史本篇, 971.
- 8) 近藤知彦・鶴見利司・宮川浩輝・西村允一(1967) 滝川畜試研報, 4:1-19.
- 9) 農林水産省統計情報部(1980) 農林水産統計(ポケット) 昭和55年版, 270.
- 10) 近藤知彦(1970) 科学技術庁資源調査会報告第56号, 253-260.
- 11) 金融財政事情研究会(1973) 食品流通の実態 農林・中小企業関係6金融機関流通問題研究会編, 342-346.
- 12) 森 彰(1971) 日綿研会誌, 8:43-47
- 13) 井川正久(1974) 日綿研会誌, 11:21-26.
- 14) 井川正久(1975) 日綿研会誌, 12:26-31.
- 15) 日本綿羊研究会(1975) 日綿研会誌, 12:41
- 16) 飼料の研究社(1975) 飼料の研究, 8:12
- 17) 難波直樹(1975) 農業構造問題研究第103号 農政研究センター発行58-71.
- 18) 畜産局家畜生産課(1977) めん羊の生産利用に関する現地実態調査報告
- 19) 畜産技術連盟(1976) 畜産技術, 8:21-26.
- 20) 畜産技術連盟(1979) 畜産技術, 1:1-11.
- 21) 団 伊玖磨(1972) エスカルゴの歌(朝日新聞社刊), 191-197.
- 22) 池田 潔(1976) 暮しの手帖, 42:174-177.
- 23) 鈴木俊二(1973) 日綿研会誌, 10:59-60.
- 24) 三村 耕(1970) 日綿研会誌, 7:1.
- 25) Goodwin, D. H.(1971) The Production and Management of Sheep, 39-62. Hutchinson Educational Ltd. London.
- 26) Ministry of Agriculture (1974) New Zealand Agriculture, 56-78. Government Printer. Wellington.
- 27) Ministry of Agriculture (1976) Sheepplan-National Flock Recording Scheme, 1-16. Government Printer. Wellington.
- 28) Donald, H. P. and J. L. Read(1967) Animal Prod., 9:471-476.
- 29) Fehse, R.(1971) Schweizerische Zentralstelle für Kleinviehzucht, 11.(ABA. 40, 81)
- 30) Canada Department of Agriculture (1972) Research Branch Report, 122. (ABA. 41, 392)
- 31) Veress, L. and A. Horn (1974) Állattenyésztés, 23 (2) 29-35. (ABA. 45, 2786)
- 32) Jakubec, V. (1975) Nás Chov. 35 (4) 136-137. (ABA. 45, 3260)
- 33) Cournot, J. (1977) Patre, 241:51-56. (ABA. 45, 3260)
- 34) Dickerson, G. E. (1977) Crossbreeding Evaluation of Finnsheep and Some U. S. Breeds for Market Lamb Production, 1-30. Agricultural Research Service U. S. Department of Agriculture and University of Nebraska.
- 35) Harvey, T. G. (1978) NZ Journal of Agriculture, 8:65-68.

- 36) Hutton, J. B. (1978) NZ Journal of Agriculture, 8:69.
- 37) Simmons, P. (1976) Raising Sheep The Modern Way, 8-44. Garden Way Publishing. Vermont.
- 38) Hulet, C. V. and S. K. Ercanbrack (1978) The Polypay Sheep, 1-7. U. S. Sheep Experiment Station. Idaho.